
IS ディストラクション・ルーラー

池谷 速人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS デイストラクション・ルーラー

【Nコード】

N0512Q

【作者名】

池谷 速人

【あらすじ】

「女装して、IS学園に行け」いきなり父からそんな事言われた。「……………は？」

納得いかないが、俺はIS学園に行くことになった。

だったら、頑張るしかないよな……。

始まり

「女装して、IS学園へ行け」

いきなり、父からそんな事言われた。

「……………は？」

俺はおそらく、鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしてるだろう。

「い、今……………なんて？」

「女装して、IS学園へ行け」

……………。

一度整理してみよう。

俺の名前は綾瀬夕紀。あやせ ゆうき

誠に不本意ながら、少し女顔で（少し？）名前の読みを変えて『ユキ』とか呼ばれる、正真正銘の男です。

俺の父と母は、IS後付装備の開発をやってる。

やってるのだが……………人気というか……………需要がなく、少し大きいビルで地味に商売してる。

まあ生活には何の不便も無いので、俺に文句はない。

そして俺はこの、データ処理とか雑用をして手伝っている。

んで、今日は中学3年生が終わった日。つまり卒業式の終わった午後。

俺は親の仕事を継ぐと決めていたので、中卒で就職
つ
てそれはいい。

いつもの通り、俺はISデータのシュミレーションをして、どんな
装備がいいか色んな試行錯誤をしていたとき、父がいきなり俺の部
屋に入るなり、そんな事を言ってきた。

よしっ、整理終わり。

「ってアホかああああああああああああっ!!」

俺は特に狭くも無い部屋で、周りの迷惑とか考えずに叫んだ。
そりゃ叫ぶでしょ。

「至極真面目だが？」

「死ね！ 俺の いや、世界の為に死ね！」

「本音が出たな夕紀」

ギクッ。

「な、何のことやら。あんたが死ねばここは俺の会社になる・・・
とか思ってたないし」

「見事な本音だな。 心配するな。俺はもうお前に会社を
託す」

「ええ？ あの口うるさい綾瀬あやせ 十紀じゅうきとは思えない発言」

「ああ。ちゃんと条件がある。それが最初に言った事だ」

「……………。IS学園は共学じゃないだろ」

「別に女子校というわけでもないぞ」

「女性しかいないだろうが！！」

「今年から男が入る」

「……………なんで俺が行かなきゃならない……………」

「お前はISを動かせる。だが男と言うのが問題だ」

「それ前に聞いた。実験動物になる可能性があるんだろ？」

「ああ。だから女装して行け」

「そこがわからない！ 行かないという選択肢は無いのか！？」

「あるぞ。だがその場合は、俺が死ぬまでお前に会社は継がせない」

「チツ。痛いところを……………」

「どうする？ 俺のオススメはIS学園に行く方だ」

「……………母さんは知ってるのか？」

「ああ。ちゃんと許可は得てる」

女尊男非のこの世界、何事も女性が優先される。母親の意思がない限り、父親の意思は潰される。

「行くか行かないか、お前が決める」

そう言った親父は背を向ける。

そういわれて、俺は無性に笑えて来た。

「ハハハ……。選択肢なんか無いだろ。この性悪爺」

「俺はまだ35歳だ。……………決めたか？」

その言葉に俺は、立ち上がって背を向けた親父に答える。

「ああ、やってやるよ。アンタが何故そんな条件を出すかは知らないが、俺はやる」

「……………そうか。ならばアレを持っていけ」

「アレって……………アレか！？ あれはこの会社の……………！」

「気にするな。俺と母さんはお前が卒業するまで旅に出る」

「……………とりあえず卒業しろ……………」

「ああ」

「厄介なことになったもんだ」

「支度しておけ」

「はいよ」

俺は半ば諦めで返事を返した。

これが、俺のIS学園に行く過程……つまり序章。

始まりはいつも突然。身をもって思い知らされたな。

だが、俺が俺であるために、精一杯頑張りますぜ。

編入初日

「ここか・・・」

俺は女子のIS学園の制服を着て、IS学園の前にいる。

俺の格好を言うと、カツラを被って、この春先にロングスカートとパットを入れた胸をあまり強調をしないように、少しコートっぽいジャケットを着ている。理由は察して欲しい。

ちなみにこの学園では、俺は綾瀬夕紀だ。読み方が変わっただけ。

俺は実技はしないで、筆記だけで編入できた。
親父が何か手を加えたな。どうやったかは知らないが。

「クラスは確か・・・1組？ だったか？」

よく分からないが紙にそう書いてあるので、白と黒の携帯を回しながら学園へと入った。

を持たせよう。

「グスツ。あ、あの……あの……」

「？ ええ?!」

話しかけられたと思ったら、目の前で半泣きしてる……副担任の方がいらっしやっただ!

……誰だっけ？ 自己紹介聞いてなかった。

「あ、あの、今自己紹介で『あ』行の、綾瀬さんなんだけど……」

「

「あ、あ。はい、すみません」

そういえば俺って『あ』行だから、最初らへんなのか。俺は立ち上がって、一度クラスの皆を見渡す。

「綾瀬夕紀です。一年間よろしくお願いします」

まあこれでいいだろ。俺はそのまま座った。

よく見ると、他のクラスメイトの視線は一番前の席に、織斑一夏に向いている。

これはラッキー。注目がアチラに行ってるから、俺は苦勞しなくても地味になれる。

俺は聞くこと無いだろうから、このまま寝てようと思ひ、机に伏せた。

パンツ！

「痛い！」

いきなり誰かに頭を、おそらく板状のもので叩かれた。

「居眠りとはいいご身分だな」

俺が目線を上げると、そこには黒のスーツを着た凛々しい方がいらつしやつた。

手には俺を叩いたであろう出席名簿。

「……へ？」

「話を聞いていたか？」

話？つてかこの人誰？ 名札か何か無いかな？。

パンツ！

「痛い！」

「聞いていなかったな」

「……………すみません、寝てました」

「はぁ……私は織斑千冬。このクラスの担任だ」

「あ、ご丁寧にどうも」

ため息をつきながら、自己紹介してくれた。俺はその場でお辞儀をする。最低限の礼儀だな。

「お前にはどうやら、色々と面倒をかけなければならぬらしい」

面倒？ なんだろう嫌な予感しかしない。

「これから授業を始める」

そんな心配をよそに、担任の先生は授業を始めた。

X X X X X X X X X X X X X X X X
X X

時は過ぎ放課後。

授業はまあ、機械専門でやってた俺なので、常識の問題しか出なかつた。

飽き飽きして、昼寝しないようにするのがやっとだったぜ。

そつえば、織斑が金髪の女子とクラス代表をかけて闘うらしい。どうでもいいな。興味が湧かない。さっさと寝たい。

と言つわけで俺は部屋で寝るため、さっさと自分の部屋を探す。

「1026号室。1111・・・のはず」

寮の部屋、書かれた番号は確かにこの部屋を指している。

「失礼するよ」

俺は扉を開けて中に入る。

中はすげー豪華だが、眠いので感動もあまりない。

俺は荷物をそこらに置き、制服のままベットに寝る。

ああ〜……………眠い。神経を無駄に磨り減りすぎた。

「そっぴゃ、ルームメイトって誰だろうか……………」

どうでもいいか。ちやちやっと寝ちゃおう。

その時、扉がガチャという音がした。ルームメイトが入ってきたのだろう。

メンドーだけど挨拶はしなければならないか。

「ルームメイトの方。綾瀬夕紀って言います。一年間よろしくお願
いします。では……………ZZZZ……………」

「人の目を見て話せ！　というか寝るな！」

自己紹介したので寝ようとしたら、ルームメイトの方に注意された。
しかし女子にしては、妙に声がハスキーだな……………。

と思っぺルームメイトを見ると……………。

「……………男？」

「あ、ああ。俺は織斑一夏。一年間よろしく」

ドカーン！　と、俺の平穩が核ミサイルが如く吹っ飛ばされる音がした。

「部屋間違えてませんか？」

「え？ 1111って1026号室じゃないのか？」

部屋番号は間違っていない。

「……………はあ……………」

「た、ため息つかれてもな……………」

「まさか貴方が」

「お、おう。ルームメイトだと思う」

「人の頭をパンパン叩く担任の……………弟さん……………ですか……………」

「

「い、いやそれは……………すまん、弁解する余地が無い」

「……………そう。じゃ寝ますんで、適当にしててください」

ああ……………絶望。

今話題の織斑一夏と同室なんて……………目立たないようにする方が無理かもしれない。

「荷物荒らさないで下さいよ」

「…するかつ…！」

「ベットに潜り込まないで下さいよ」

「するかっ!」

「それじゃあおやすみなさい」

「え、ああちよつと!」

なんだよ……。嫌々起き上がり、安眠を妨害する敵を俺は睨みつける。

「なにか?」

「あ、いや……。その……」

ん? なぜコイツは顔を赤くして俺から視線を逸らす。眼を見て話せといったのはコイツだろ。

「ISについて教えて欲しいんだ」

「……zzzz」

「寝るなっ!」

「ああ、あまりに変な事を聞くので、寝てしまいました。反省はしてません」

「失礼だなっ!」

って言われてもなあ……。

「寝ますね。おやすみなさい」

「い、いや！　そこを何とか！　頼む！！」

寝ようとしたら、いきなり俺に土下座して頼み込む。

「……はあ。都合が合えば、ですが」

「そうか！　いやありがとな」

「それはそうと。なぜ初対面の私に、そんなこと頼むんですか？」

「ん？ん〜……まあなんと云うか……気が合つと思つたからだな」

「そうですか。まあ、ルームメイトとしてこれからよろしく」

俺は右手を出す。

「おう。よろしく」

織斑も右手を出す。俺たちは握手をした。

「じゃ寝かせてくれ」

「いきなり敬語が無くなった！」

「この喋り方は疲れるんだよ」

「男っばい喋り方だな」

「まあ、おと
な」
ゴホン。周りがそういう奴らだったから

「ふ〜ん。ま、明日からよろしく頼む。セシリアに勝たなきゃならないんだ」

「激しくどうでもいいが「おい」、頼まれたのなら最後までやるのが、私の理念だからやるよ」

「ホント頼むな」

「了解了解」

そのまま俺は眠った。絶対明日から俺は目立ってしまうと考えながら……。

プロフィール(仮)(前書き)

変更がおそらく入るので(仮)です。

プロフィール(仮)

名前：綾瀬夕紀あやせ ゆきき

年齢：15

性別：男

誕生日：11月11日

血液型：B

容姿：銀髪ショートカット。IS学園編入時は、銀髪の長髪カットを被っている。

目は真紅、少し童顔で女子っぽい。

好きなモノ(趣味)：睡眠、食事、機械を弄る事、人を追い詰めること、音楽。

嫌いなモノ(こと)：勉強、騒がしい所、目立つこと、文字しか書いていない本、礼儀正しいこと。

口調：一人称は『俺』だがIS学園では『私』で、初対面には敬語。親密な間柄には砕けた口調。

IS学園では、一人称が『私』になっただけで、基本的なことは変わらない。

性格：基本的に面倒なことはしない。気まぐれ、自分の事第一。だ

が気が向けば手伝う。自ら脇役を望んでおり、主役になることを嫌う。

詳細：市立中学に通っていた普通？の中学生。

両親がIS関係者で、その手伝いをしていたので自身もISについて詳しい。

男でありながらISが動かせるが、諸事情で女装してIS学園へ通う。

幸か不幸か演技力とはとてつもなくレベルが高く、夕紀が女装していることに気付く人はいない。

専用機：『ノワールセイバー』

夕紀の両親と夕紀自身で魔改造した『打鉄』世代不明。意味は『黒い救世主』

見た目は『打鉄』の色が黒を強調した白になっている。

背中に巨大な翼型スラスタ―兼二振りの対艦刀が付いている。

全身に追加装甲されており、『打鉄』より二回りほど大きくなっている。

武装系統から、中距離・近距離戦闘を得意とする。通常時は白と黒の携帯。

武装は夕紀自身が考案した武器が元となっており、近接戦闘に主眼が置かれている。

武装一覧

《シュベルトソード》

『打鉄』の刀を改造した剣。意味は『切り裂く剣』
刀が両刃の大剣と改造されていて、超振動させることにより破壊力が増している。

さらに二つに割れて《シュベルトソード・ツイン》という双剣として扱うことが出来る。

普段は両肩にある鞘に二つに分けて保持する。この場合は盾として扱える。

《アーマーシュナイダー》

両腕に一本ずつ装着されているコンバットナイフ。意味は『装甲を切り裂く者』

エネルギーを使わず使用出来るので、非常用の戦闘に使用される。

必要に応じて刃の部分が伸ばす事が出来る。

《アーマーライフルシヨ・ティー》

両腰に一丁ずつ保持されている小型ライフル。意味は『装甲を撃ち抜く者』

遠距離での戦闘ではなく、近接戦闘を想定した小型ライフルで、通常の二分の一ほどしかない。

しかしその分、エネルギー消費は抑えられて連射性に優れている。しかも連結させると事で《アーマーライフルロング》として扱える。

これが唯一の遠距離武器。

ちなみに《アーマーシュナイダー》を装着し、銃剣として扱うことが出来る。

《ブレイドゲベル》

背中にある巨大なスラスターを、二つに分離して使う実体刀。意味は『撃つ刀』

逆刃部分にブースターがついていて、ビーム刃を展開することが出来る。

名前に”撃つ”とあるが、まだ試作段階のため銃として扱うことは出来ない。

今のところ判明している武装はこれだけ。まだ後付装備が増える可能性がある。

システム系統

《トランスフォーメーション》

追加装甲を分離・合体するシステム。操作が面倒なので夕紀はあまり使わない。

分離することで対物シールドビットとして運用。これ自体の耐久力はあまりない。

合体の組み合わせで巨大な砲台、巨大なシールドビット、各武装に装着して、武装の強化をすることが出来る。

分離した分、機体の防御力がガクンと落ちて、通常のスปีドが上がる。

ちなみに、追加装甲を全て破棄した状態を『ノアールセイバー/フアントム』と呼ばれる。

意味は『黒幻の救世主』

《??????》

名称、システム内容一切不明。

ワンオフ・アビリティー《ディストラクション・ルーラー》
これに関する詳細は一切不明。

プロフィール(仮) (後書き)

意見があったらください。

俺が何をした？

誰もが寝静まった深夜。

今夜は月が雲で隠れて、何の光も部屋に入らない暗闇。

俺は一夏が寝るのを待って、やっと寝たらしいので、俺のISである携帯電話を開いた。

そして、ある人物へ電話をかける。

『もしもし』

「俺」

『君か。どうだい？IS学園は。十紀が楽しめと言ってたよ』

「楽しむかどうかはさておき………潜入成功。バレては無い」

『君がそんなミスするはずは無いよ。それで、何か不自由なことは無いかい？』

「ルームメイトが織斑一夏という事」

『一応仕事のためだろうに。君が君であるための』

「うっさい。それぐらいわかってる」

『なら別にいいけど。機体で不便なことは？』

「まだ使っていないから分かん。ただ、射撃武器をちょっと作っておいてくれないか」

『あゝ……。小型銃とピットぐらいしかなかったね。システムを抜くと』

「そぞ。何が起こるかわからないからな。まだまだ容量があるし、入れる事は出来る」

『射撃武器は苦手じゃないのかい？』

「だからよお。遠距離から牽制できる、超出力レーザー銃なんかを」

『当てるのは二の次って……。まあわかったよ。その代わり』

『

「ああ。ちゃんと仕事は全うする」

『分かってるならよし。いや〜しかし、十紀が迷惑かけるね〜』

「全くだ。わざわざ女装してまで……。一夏はそんな事しないのに」

『織斑一夏は、あの初代ブリュンヒルデの弟だ。IS操縦者世界の力は絶大と言うことだね』

「実験動物になるのは姉が許さない……。ってか？俺とは大違いだ」

『君の場合、裏の事を知りすぎた。だからテキトーな言い分つけて、すぐにでも捕まえに来るだろうね』

「重々承知。……そういや、奴らの動向は？」

『十紀が放浪しながら探してるよ。今のところは特に無いね』

「連絡があつたらよこせて言ってくれ。母さん」

『私が連絡してもいいけどね』

「母さんにはホラ、装備の開発をしてもらいたいからさ」

『サラリと母親を顎で使うとわね。ま、伝えておくよ』

「ありがと。じゃあ」

『がんばってよ』

そして俺は通話を切る。

「あゝあ……奴ら……か」

まったく。思い出したくなかったな。あんな記憶。あんな奴らなんて。

” 　　　　　　なんで！……なんで見殺した！

”

” お前に何が出来た！人殺しを知らないガキが！

”

” できたさ！人殺しのアンタよりは！

”

” だからお前はガキだと言ってるんだ！

”

” うるさい！だったら証明してやるよ！力を手に入れ
てやる！

”

” ……！！ッ………わかった………もう好きにしる……

”

「チツ………。俺はもう力を手に入れた。あんな事、二度と
繰り返してたまるか」

もう寝よ寝よ。こんな胸糞悪い日は早く寝るに限る。
………言ってもう夜中の2時だが。

「寝るぞー………」

早朝、自分のベットでゆっくり寝ていたら、いきなり俺の布団を夏が引き剥がした。

「なにするんだよ!」

「もう時間だぞ!」

「え……?」

俺はベットの横にある、持参した時計を見る。

「ホントだ」

「さっさと支度しろよ」

もう一夏は制服に着替えている。俺は制服だがこれは昨日の制服だ。

「了解」

俺はコートっぽい制服を脱いで、下のロングスカートも脱いで、スベアの制服を着ようとして、

「わああああ!」

一夏が驚いて急いでトイレに隠れる。

「い、いきなり脱ぎだすな!」

「あ……。すまんすまん」

女だって設定をすっかり忘れていた。

俺はバッグからスペアを出して、ちゃちゃっと着る。着やすい構造に改造したから。

「もう着た」

「ほ、ホントか？」

「ああ」

そして挙動不審な感じで、一夏がトイレから出てきて俺の方を向く。

「よ、よかった・・・」

「どうせ耐性が付くだろ。ここで生活するんだから」

「だからって、異性の前で脱くなっ！」

朝から怒ってばかりな一夏君。血圧が上がっちゃうぞ。ちなみに俺男だけ。

「さっさと食事」

「無視しやがって・・・」

ブツブツ愚痴をこぼすが、一夏は俺と一緒に食堂へ向った。

「篠ノ之箒だ。一夏とはどういう関係だ」

「ルームメイトですけど」

なぜか篠ノ之さんとやらに、一夏との関係について尋問された。どうでもいいのが、早く終わらせないと味噌汁が冷めてしまう。おいしそうなのに。

「もういいですか？」

「ま、待て！ 一夏に手など出していないだろうな」

手？ 一体何の話なんだか。

「ちょっと意味が不明なので、もう少し主語と述語をハッキリしていただけると・・・」

「う、うるさい！ ええい一夏！」

「俺に振るのかよ」

一夏は鮭の切り身を食いながら、面倒そうにこちらを向く。

コイツ、自分が元凶と言うことに気付いてないのか？ 切り刻んでもいいかな。

「なあ箒。さっきから一体何で興奮してる？」

「じ、興奮などしていないっ！」

自己申告する人ほど真っ黒だ。

「やましい事は何もしてないよな？　一夏」

「ああ。ってか夕紀はすぐ寝たし」

「眠かったから。睡眠は色々と役に立つんだぞ」

「それぐらい、俺だって重々承知だ」

などと他愛の無い話をして、俺と一夏は食事を取ろうとするど、

「い、いつの間にそれほど仲良くなった！」

と篠ノ之さんとやらに怒鳴られた。

「ルームメイトですし。仲良くしなければ」

「上に同じ」

と至極マトモなことを言うと、いきなり篠ノ之さんに首を掴まれ、そのまま食堂の隅まで拉致られる。

すげえ手馴れた動作だが、もしかして過去に人を誘拐したことあるんじゃないの？

「おい綾瀬。一夏に変なことをしてみろ、私の刀が黙っていないぞ」
変な事ってなんだよ。あとそれは脅迫と取っていいのでしょうか。

「ですから言葉の意味が

」

「何度も同じことを言わせるな」

言葉を遮り、ギロリツと俺に睨みを向ける篠ノ之さん。これって理不尽じゃない？

「了解しました。変な事とは何か知りませんが、誠心誠意を持って頑張らせて頂きます」

もうどうにでもなれ・・・ってなわけで、一応篠ノ之さんの指示に従った。

「そうか。お前となら、いい友達となれそうだ」

「……………そうですね」

こんな出会いでなければ、とりあえず友達にはなれたでしょうね。

「私の事は筈でいい」

「じゃ私の事も夕紀で。あと敬語外れるよ。親密な人とは敬語は使わないと決めてるので」

「ああ。構わない」

「それじゃあお構いなく」

話が一段落（俺はわかってないが）したので、俺と筈は一夏の近くの席に戻る。

「なんだったんだ？」

「気にしなくていい。なあ篤」

「ああ。その通りだ夕紀」

「そうなのか

ってあれ？ 名前で？」

「いって言ったから」

「うむ」

俺の言葉に頷く篤。仲良くなったのはいいが……あの脅迫内容が未だに分からない。

下手な行動はしないようにしよう。

で……さっきから周りからの視線を感じる。主に嫉妬のような視線だ。

一夏と仲良くすると、女子からあらぬ誤解や嫉妬を受けるといふことか。ヒドイ話だ。

「一夏、篤。私は先に行ってる」

「お？ おっ」

「ああ」

俺は食器を片付けて食堂を出た。やっぱり目立ちたくないし。

X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X

そして今は二時間目が終わった時点。

意識を断ち切らないように、俺は舌を嚙んで何とか？ぎとめてる。
・

今やってる内容は、俺が親の手伝いを始めた時に、すでに頭に叩き込んだ内容。

暗唱できるぞ。今の一時間の内容。

もう寝てしまいたいが、そうになると担任の出席名簿が頭に当たる。これは拷問と言っても過言ではないと思う。精神的に肉体的に。

キーンコーンカーンコーン。

やっと待ちに待った、救済のチャイムが鳴った。

「あつ。えつと、次の時間では空中におけるIS基本制動をやりますからね」

マジか。この睡魔に襲われる中、まだ授業はあるというのか。

なんか一夏のほうが騒がしいが、俺は唯一の寝れる時間である休み時間に寝ておこう。

X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X

ハローハロー。お昼休みになったよ。

ここまでの時間で、一夏に専用機が来るとか、箒が篠ノ之博士の実妹だったりと、色んな話が出てきたが、どうでもいいですよ。

「夕紀。一緒に飯食わないか？」

「ん？ 別にいいよ。暇だし」

俺は一夏の誘いに乗り、学食へ乗り出そうとすると、一夏は箒と腕を組む。

「他に行く奴いないか？」

「う、腕を組むなっ！」

などとイチャついてる。周囲に自分たちのラブラブさを自慢したいのか？

「は、離せっ！」

「学食に着いたらな」

「い、今離せ！ ええいつ

」

するといきなり一夏が一回転して投げられ、地面に背中を打ちつけた。

「……………」

周囲無言。おそらくこの現状を全力で引いてる。

「腕上げたなあ」

「ふ、ふん。お前が弱くなったのではないか？　こんなもの剣術のおまけだ」

ほう。箒にとって古武術はおまけらしい。食元買えば付いて来るかな？　ハハツ、無理か。

「え、えーと……」

「私たちやっぱり……」

「え、遠慮しておくね……」

その時、一夏が集めたであろう女子たちが散開した。どうでもいいのだが。

一夏は女子を集めて、一体どうするつもりだったのだろうか。食堂で”ここは俺のハーレム！”って宣言したいのか？

「夕紀、箒」

「ん？」

「な、名前で呼ぶなど」

「飯食いに行くぞ」

と言って箒の腕を掴んで引っ張る。

「いや元々そのつもり」

と言いながら俺はついて行く。誘われたし・・・ねえ？

「お、おいつ。いい加減に」

「黙ってついて来い」

「むっ・・・」

なんか少し不機嫌になった一夏は、箒を強引に黙らせて食堂に向った。

あつという間に学食到着。すげー混雑してるが、俺等が食べるスペースはある。

「箒は何でもいいよな。何でも食うし」

「ひ、人を犬猫のように言っな。私にも好みはある」

「あっそ。あ、日替わり二枚買ったからこれでいいな。鯖の塩焼き

定食だよ」

「私の分はどこ行ったんだよ」

一夏は二人分しかとらない。自分で誘ったくせに忘れてる。

「あ、悪い」

「なんてな。もう取ってあるからいいさ」

俺は手にある『麻婆豆腐定食』と書かれた札を見せる。

「それよりもっ！ 人の話を聞いているのかお前は！」

空気になってた筈が話に入る。

「聞いてねえよ。俺がさっきまでどんだけ穏和に接したと思ってるんだ馬鹿。全部台無しにしゃがって。お前、高校生活で友達が夕紀だけって悲しすぎるだろ」

「コラそこのハーレム男。今失礼なことを口走ったな？」

だが俺の指摘は無視された……。くそう、殴り飛ばしてやろうか。

「わ、私は別に……。頼んだ覚えは無い！」

「俺も頼まれた覚えはねえよ。あ、おばちゃん、日替わり二つで。食券はここに置いとくよ」

「私は麻婆定食で」

プラスチックの食券をカウンターに置く。
ちなみに一夏はまだ箸を掴んでる。そんなに離れたくないのか？
ラブラブだな。

「いいか？ 頼まれたからって俺はこんな事、普通はしないぞ。箸だからしてるんだぞ」

「な、なんだそれは・・・」

「なんだも何もあるか。おばさんには世話になったし、幼なじみで同門だろ。これぐらいのお節介はやらせる」

「・・・・・・・・・・」

無言。箸は視線を天井に向ける。表情はむすつとしてる。

「そ、その・・・ありが」

「

「はい、日替わり定食+麻婆豆腐定食、お待ち」

「ありがとう、おばちゃん。おおっ、うまそうだ」

「うまそうじゃなくて、うまいんだよ」

「ちよ、一夏。取ったなら退け」

「くくく」

一夏が列を離れたので、俺は自分の頼んだ定食をとる。
確かにうまさ

失礼、絶対うまいな。

「箒、夕紀、どうかテーブル空いてないか？」

「さあ？」

「箒は？」

「……………」

「箒？」

一夏が何度呼んでも箒は反応を示さない。表情は”むすつ”から、
より不機嫌に変化している。

「……………」向こうが空いてる

一夏の手を振りほども、自分の分の定食を持って歩く箒。
絶対に一夏が悪いな。理由は知らないが。

とりあえず俺等は箒の後を追ひ、少し席の空いたテーブルに座る。

「そついやさあ、夕紀」

「ん？」

俺はご飯に麻婆豆腐をかけて、麻婆丼を作ってる最中。

一夏は切り身を解しながら聞いてきた。

「ISの事教えてくれんだよな」

「まあな。別に嫌なら止めてもいいぞ」

「いや！ このままじゃあ来週の勝負では、何も出来ずに負けそうだから」

「くだらん挑発に乗るからだ、馬鹿め」

箒から指摘。ここで俺は発見した。

（なるほど。くだらん挑発に乗ったから、こんな面倒な事になっているのか）

箒、グッジョブ。と、俺は心の中で返した。

「ねえ。君って噂の子でしょ？」

その時、いきなり一夏の隣に人が来る。リボンの色から3年生だろう。

詳しい描写は、とある小説にでも載っているだろう。

「はあ、多分」

一夏が返事を返すと、先輩は滑らかな動作で一夏の隣に座った。

「代表候補生の」と勝負するって聞いたけど、ほんと？」

「はい、そうですけど」

「でも君って素人だよな？ IS稼働時間いくつくらい？」

「いくつって・・・20分くらいだと思いますけど」

「お前そんな初心者で喧嘩売ったのか？ 勝てるわけ無いだろ」

おもわず口を挟んでしまう。だがコイツは、ISの事を知らなさ過ぎてるぞ。

「その子の言う通り。それじゃ無理よ。ISって稼働時間がモノを言うの。その対戦相手、代表候補生なんでしょ？ だったら軽く100時間は越えてるよ」

そういうが、コイツはいまいちピンと来ない表情をする。

お、おいおい。コイツ織斑千冬の弟じゃないのかよ。今のは常識だろ。

「でさ、私が教えてあげよっか？ ISについて」

その言葉に、俺は脊髓反射で答えた。

「それがいい。一夏、そうしてもらえ。経験豊富な先輩の方が絶対にいい」

よっしゃ！ これで面倒事から開放される！

「そ、そうだな。ぜひ」

「結構です。私が教えることになっていますので」

「一夏が何か言うのを、食事しながら箒が遮る。あれ？ 箒が教えることになってたのか？」

「あなたも一年生でしょ？ 私のほうがうまく教えられると思うなあ」

「……私は、篠ノ之東の妹ですから」

「篠ノ之つて

ええっ!？」

先輩がみつともなく驚く。まあ希代の天才さんの妹が目の前にいたら驚くか。

「ですので、結構です」

「そ、そう。それなら仕方ないわね……」

先輩は軽く引いた感じで席を立つ。

「箒」

「なんだ？」

「なんだって……教えてくれるのか？」

「そう言ってる」

最初からそう言っていればいいのに。まあ面倒ごとが回避されたからいい。

「じゃ私は、何もなくていいんだな？」

念のための確認。一緒にしようとか言い出したら、殴り飛ばしてやる。

「俺はどっちでもいいが・・・箸は？」

「私も構わない」

つまりどっちでもいって事か。

「私はいいや。部屋でのんびりさせて貰おう」

「そうか」

「ああ。聞きたいことがあったら気軽に聞いてくれ」

「わかった。ありがとな」

「別にいい」

そして俺は食べ終わったので、食堂を後にした。

だがそんな事言つてられないか。奴らがいつ動くか分からない。

そうなる前に、俺が奴らを

ガチャ。

「は〜・・・疲れた。さっさとシャワー浴びるぞ〜」

一夏がそんな事言いながら入ってきた。俺は携帯をしまつて迎える。

「一夏。特訓してきたか？」

「ああ。特訓+明日からトレーニングを再開するんだ」

「再開？　なんかやってたのか？」

「ああ。箒の道場で剣道をな。まあ中学は忙しかったからできなかつたが・・・」

「んで体が鈍つたと・・・」

「情けない話だけどな。まさか俺がIS学園に来るなんて思わなかつたし」

「始まりはいつも突然さ」

ピリリリリリリ。

突然俺の携帯が動き出す。この音は電話だな。

「どうした？」

「いや、電話が来たただけだ。どれどれ……」

俺はトイレに入って携帯を開く。……非通知。面倒な予感。

「もしもし」

『親を顎で使う息子か？ 俺だ』

「なんだ、親父かよ。非通知電話だからなんだと思った」

『すまん。携帯が壊れてしまったんだ。それで……うまくやっ
てるか』

「あ……どうだろうな。まあバレては無い」

『ならいい。それで連絡だ。風の噂で聞いたんだが、奴らが動き出
した。健闘を祈る』

「………ほいよ」

ピツと電話を切る。奴らが動き出した……ね。

「誰からだ？」

「親父から。なんか心配してたらしい」

「・・・親父・・・か」

？ なぜか一夏の顔に影が入る。まあいいや。

「それはそうと、先にシャワー使っていいか？」

俺男だし。女風呂に入るわけには行かないし。

「え？ お前女子なんだから、風呂に入ればいいだろ」

「え？・・・あつ・・・しまった・・・」

すっかり忘れてた。一夏はその事知らないだった・・・。

「人混みが嫌いなんだ。頼むよ。私が後でいいからさ」

別に人混みが嫌いなわけではないが、女子しかいない風呂に男子が行くわけにもいかんだろ。

俺の理性が崩壊してしまう。野獣になる。犯罪者になる。

「まあ確かに。わかった。先に俺汗流したいから入るけど」

「どうぞどうぞ」

よし。これで難関は突破した。案外楽だったが。

そんなこんなで、今日と言う日は終わった。

「眠いんだよ・・・ふあゝ・・・ZZZ」

「・・・もういいや。箒、気のせいかもしれないんだが」

「気のせいだろう」

「気のせいじゃすまないんだが・・・」

そつえば。一夏のISはまだ来ていない。つまり闘えない。ご愁傷さま。

「ISの事はどうなった？」

「・・・(汗)」

「目をそらすな」

おおゝ箒さんが目を逸らしてる。

ISも教えて貰ってなかったのか。可哀想に。みつともなく負けてしまうな。

「you! せいぜい足掻いちなYO!」

「うぜえぞ夕紀!」

やれやれ・・・せつかく人が励まそうかと思ったのに・・・。
人の好意を無視するやつだったとは・・・。

「せつかく励まそうかと思ったのに・・・」

「お前の場合、言葉に悪意が満ち溢れてるんだよ！」

「あ、バレた？ 最近の高校生は意外と鋭い」

「バレバレだ！ 最近じゃなくても分かるからな！」

「あ〜〜うるさいうるさい。頭にガンガン来る〜〜・・・」

と言いながら席を立つ。

「遠くから観客席で、一夏が無様に負け」

おっと・・・

活躍する姿を見せて貰うよ」

「お前ホント嫌味なヤツだなあ！！」

なんか叫んでる一夏を置いて、俺はこの場を後にした。

「言ったからには・・・見ないとなあ・・・」

俺はアリーナから観客席へ行こうとしている。

「はあ、はあ、はあ！」

その時、すごい急いでいる副担任を見かけた。

全力で走ってるけど、まあ気にしても仕方ない。スルーしよう。

「おい綾瀬」

.....。

「ひゅ、ヒュ〜 ナ、ナニモキコエナイ〜」

バンツ！

「痛い！」

「喧嘩を売るのなら買っぞ」

うわぁ。担任教師のセリフとは思えない。というか、買っと言っ前にもう叩いてます。

「な、なにか用ですか・・・」

「織斑のIS整備に時間が掛かる。それでどう足掻いても、予定の時間も過ぎてしまう」

「はあ。それが何か？」

「お前、その準備が終わるまでオルコットの相手をしろ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・何を言い始めたのかな。この担任教師は。」

「きよ」

「拒否権は無しだ。これは命令だ。従わんという選択肢は無い」

「な、なんだってー・・・・・・・・」

俺、今教育者と話してる気がしないのですが。犯罪者と喋ってる気分。

「『打鉄』がアリーナの隅に予備が置いてある。暇つぶしにやられて来い」

「ヒドイ……。やられるの前提ですか・・・」

「当然だ」

カッチーン。今は頭に來たね。キレチャッタネ。

「いいでしょう。ご期待に添えないように、全力で頑張りますよ」

「そうか。・・・・期待してる」

そう言っただけで担任教師は副担任の後を追った。

「急遽代打を頼まれた悲しいルームメイトです」

俺は『打鉄』を纏って、一夏と戦うはずの代表候補生……オルコット……だったかな？

すでにIS……えっと……ブルー……なんちゃらって機体を纏っている。

上から見下されてます。気分悪いです。

「ああ……確か初日で織斑先生に頭を叩かれましたね」

「まあ。それで、一夏は時間が掛かるらしいので、それまで私が」

「相手にしてくださる………ということでしょうか？」

「まあ、簡単に言えば」

「舐められたものですわね。たかが『打鉄』程度で私と張り合おうなど」

「私もそう思います」

激しく同意。だったら俺の機体使っていいかな。

「まあ？私もちょうど暇ですし、少しだけお相手をしましょう」

？俺が仕方なく相手するのに、何時の間にかアチラが相手するとか言ってる。

「わたくしが相手するだけでも、光栄に思っただけですわね」

はあ？ 何言ってるんだよこの女。

「……………クダラナイ」

「何か言いました？」

どうやら聞こえなかったらしい。それなら良かった。

「……………始めましょう」

俺は刀を構える。

「私は構いせんけど、ハンデをつけなくていいんですか？ 私が勝つのは自明の理ですし」

「……………ふう」

ホントくだらない。まあいいや。テキトーにやるか。

「御託はもういいですので」

「……………あら？そうでしたか。それはすみませんね！」

怒りマークが入ったと思ったら、アチラが巨大なレーザー銃を撃ってきた。

俺は刀を使って軌道を逸らす。ちよいとキツイが……………出来なくはない。

それを見たオルコットは、少し驚いた表情をした。

「少しはやるようですね」

「どうも」

「ですが、それで調子に乗らないでいただけるかしら！」

その言葉と同時に、オルコットのISから四機の……ビットが射出された。（名前知らん）

「流石は第三世代型専用機」

オルコットが手を振ると、四方向同時による、ビットのオールレンジ攻撃が始まる。

だが、俺はいち早くその場を跳躍して、ビット包囲網を抜ける。

「逃がしませんわ！」

しかしオルコットは、跳躍した俺を素早く捕捉、ビットをこちらに向かわせる。

切り替えの速さは流石……けれど俺は捉らえないさ。

ビットの攻撃を俺は次々とかわしていく。まあ少し掠ったトコもあるが。

「くっ！」

オルコットが一生懸命ビットを操作するが、ほとんど俺には当たらない。

当たったとしてもたいして効かない。俺がそういう風にしてるのだから。

オルコットのビットは俺の隙を攻撃してくる。それを早々に見破った俺は、自ら隙を作って、攻撃をそちらに誘導している。

「なんで当たりませんか!？」

「さあ?」

しかもオルコットは、俺に攻撃を当てられない事で、苛立ちと焦りが生まれてる。

そしてこれは、彼女の言う『暇つぶし』という戦闘。熱くなりすぎな気が。

「一応これって、時間つぶしの戦闘……だった気が」

「そんなのどうでもいいですわ!」

「ええっ?!」

この人、今日ここに来た理由を覆しましたよ。

「今は貴方を倒します!」

「いや、その殺る気は一夏の時に発散してくれると……」

「貴方でなければ意味ありませんわ!」

おお。意外といいセリフ。こんな状況でなければね。

「一夏まだかなあ・・・」

疲れてきた。主に眠気で。久しぶりに体を動かした・・・と言っ訳でもないが・・・疲れた。

「夕紀！」

噂をすれば。後ろからISを纏った一夏が来た。

「オルコットさん、ストップ」

と言って俺は、周りに浮いてるビットを峰打ちで叩き落した。

「なあっ!?!」

なんか驚いてるが、俺にとってはそれ所じゃない。

「一夏、遅い」

「わ、悪い。意外と時間掛かっちゃまって・・・」

「ま、いいや。そんじゃ」

俺はISの腕を上げる。それに習い一夏も腕を上げる。

「バトンタッチ」

「おう。後は任せろ」

ガンツ！と、金属同士が鈍い音を立てるが、俺と一夏はハイタッチをした。

「終わった終わった」

俺は役目を終えた役者のように、アリーナの隅の方へ移動した。

そしてもう用のない『打鉄』を解除した。ちゃんとしゃがんで。

「綾瀬」

そのまま寝ようと思ったら、何時の間にかアリーナの出口で担任教師が立っていた。

「ちゃんとご期待には添えなかったですね」

「そうだな。残念な限りだ」

またまたそんな酷い事を。

「それはそうと。お前に3つほど質問があるのだが」

「？ なんですか？」

「お前、ISスーツはどうした」

と言われて、俺は自分の格好を見る。……普通に制服だ。

「着てませんね」

「着ずにやったのか。あの戦闘を」

疑うような担任の目。俺は言いたいことがあるので言った。

「忘れてしまって。なにしろいきなり言われましたから」

「・・・そうか。二つ目だが、あの刀は何だ」

「『打鉄』の装備ですが？」

「違う。お前がオルコットの初撃を弾いた刀だ」

まさか見られていたとは。俺が出したのはたった一瞬だったのに。

あのレーザーを『打鉄』の刀で防ぐのは無理だったので、俺は一瞬だけ専用機のほうの剣を出して、弾いた後すぐにしまった。普通は見えない速度なんだけどな・・・さすがは織斑千冬。

「私は、アレ以外の刀を出した覚えはないですが」

とぼけてみよう。正直に言う必要はどこにもない　　ってかデメリットしかない。

「・・・なら三つ目の質問だ。お前は綾瀬あやせ創紀そうきという人物を知ってるか」

「！ーッ」

まさかこの人から、その名を聞くとは思わなかった。

綾瀬創紀^{あやせ せうき}。俺の実の祖父。

俺の誇るべき目標で・・・決して語られることのない裏の英雄。もし語られていたら、福沢諭吉と並ぶ知名度になっただろう。そして祖父の活躍を知っている、数少ない人はこう呼ぶ。

『破壊する救世主』と

「・・・誰ですかそれは？ 私と同じ苗字ですけど」

知らんぷり。もし俺が綾瀬創紀の実の孫だとしたら、俺は色々とマズイ立場になる。

俺はそのまま、担任の横を素通りしようとする。

「・・・コレだけは言っておくぞ。綾瀬」

そして俺が隣に差し掛かったとき、担任が口を開く。

「お前が牙を向くなら、私の刀は容赦なく切り裂く。覚えておけ」

「・・・牙を向くなら切り裂く・・・ね。

「なら・・・私からも言っていていいですか？」

俺はそのまま通り過ぎて、少し距離が開いたところで一度止まって言う。

「　　貴方が何度切り裂こうが、俺は貴方の頭を噛み砕いてやる。頭に刻んどけ」

そう言って俺はその場を去った。

X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X
X X

「あゝ．．．負けちまったな．．．」

俺、織斑一夏は、自室に戻りながら、今回の戦闘について考えていました。

．．．って誰に対して説明してるんだか。

「しかしセシリアは強かったな．．．代表候補生ってあんなに強いんだな．．．」

もつとも。最後の一撃さえ当てれば．．．．．まだわからなかった。

「．．．あの場面でエネルギー切れしたんだ．．．．．なあ白式」

俺は腕につけてある白のガントレット　　白式の待機状態だ
に呟く。

まあ、原因はわかっているけどな。

「『零落白夜』．．．まさに諸刃の剣だな。俺に使いこなせるか．．．?」

と弱音を吐こうが、使いこなさなければならぬということとは、俺だつてわかっているぞ。

「そのあと千冬姉と筭にダメ出し食らったし．．．．前途多難だ．．．」

と言ったところで、あることに気付く。

「そついや夕紀を見てないな。俺の代わりに闘ってくれた所から」

まあアイツの事だ。どうせ『疲れた。眠い。おやすみ』なんて感じで寝てるんだろ。

たった2日一緒にいただけで、ここまで相手を知れることって中々ないぞ。

ついでにあんな女子に会うのも。まあ親しみやすく助かった部分もあるが。

「でもアイツ強かったな・・・セシリアの攻撃をほぼ全て避けてた」俺が白式の準備をしながら、モニターで見たあいつの戦い、素人目の俺でもスゴイと思った。

最初はビットの攻撃を、最初の方は掠ったりしてたけど、それはあまり効いてないし、途中からセシリアの攻撃パターンを読んだからか、まったく言っていないほど当たってなかった。

あ〜〜なんて言うんだろうな、こつこついうの。

戦闘のプロはプロだけど、機体操縦や性能じゃなくて、何事も頭で考えて勝利するって感じかな。

篝や千冬姉とは違う戦闘スタイル。

あの二人は、己の高い技量で勝利を強引に掴み取るって感じ。性格にも出てるだろ？

だがアイツの場合は違う。

まるで勝利へのシナリオを考えていて、その通りに自分、そして敵も動かして勝利を掴み取る。

言うなれば、初めから勝つ未来が決められているかのように。

「そついつのは・・・ある意味・・・ツライ・・・よな」

自分の敗北というシナリオを、その通りに動くしかない気持ちを想像するだけで、ゾツとする。

だ
運命には誰も抗えない。故に、その抵抗は全て無意味

まるで、そんな事を暗示してるかのように。

「・・・・・・・・あいつと戦うときは、運命を捻じ曲げる必要がある・・・・か」

言ってる矛盾した感じの言葉だが、俺は最初から敗北するなんて戦い、まっぴらゴメンだからな。

切り開いてやるさ。俺の運命は俺が決める。それが勝利かどうかは別として。

「・・・・・・・・さてと。明日から精進するか！」

考え事を切り上げて、気持ち改める。心が不安定なら体も不安定。体は心について行くからな。

ちようど部屋の前にも来たし、今日は疲れたので早目にシャワー浴びて寝るか。

と思つて扉に手をかけると

。

「いや違つて。……え？ いやだから、親父が言ってるのは」

部屋の中から、アイツの声が聞こえてきた。多分電話で話してるんだろ。

(……盗み聞きってよくないよな……だが入って邪魔するもの……)

と、どうしようか俺は悩む。しかしそんな俺を余所に夕紀の声は聞こえる。

「だからISの事はいいから……は？ 『ノールセイバー』で充分だつて」

……『ノールセイバー』ってなんだ？ 機体の名前か？

だがそんな洒落た名前は、普通専用機につける。ブルーティアーズみたいな。

じゃあ……まさか夕紀は。

(日本の代表候補生か!?)

……つて待て待て。日本なら名前も日本語のはずだろ。『ノールセイバー』って完全に外国語だ。でも……じゃあ一体何の機体だ？

「とにかく。大事なことがない限り連絡は　これも大事？ 全然大丈夫だから。また用があつたら電話するよ。わかつてる。任務と自分の目的は果すよ。じゃ」

・・・任務と自分の目的。不可解な単語を残して、夕紀は電話を切ったらしい。

何故か俺の本能が叫んでる。”絶対に巻き込まれない方がいい”と。

「・・・・・・・・とりあえず、部屋に入るか」

いつまでも部屋の前でジツとしてる訳には行かない。俺はドアを開いた。

「はあく疲れた」

「・・・あれ一夏？ 随分お疲れみたいだな」

すでに寝る前だったか、夕紀は白と黒の・・・・・・・・パジャマを着ている。種類は知らん！

俺に返事を返す夕紀は、手に持った白と黒の携帯を閉じて机の上に置く。

俺はなるべく平静を装っておく。

なんか無意識のうちに、さっきの事はコイツにバレない方がいいと思っただ。

「仕方ないだろ・・・初専用機の試験運転もなしに、いきなり実践とか」

「惜しい所まで行っただろ？」

「まあな・・・・・・・・って見てたのか？」

「いや見てないけど。それぐらいわかるさ。私は計算して戦うタイ

「ブだから」

自分の頭を指差しながら言う夕紀。

それは俺とセシリアの力量を、頭の中に入れてシミュレーションした結果だろう。

だがまさか、見ないで試合の結果を言い当てるなんて。

コイツの紅い両目は、まるで全てを見透かしてるように、俺の姿を捉らえている。

……改めて、コイツの戦闘スタイルが怖くなったぜ。

「私に見立てでは、最初は押されてやられそうになった。まあ白式も一夏に会わせないといけないから。

けど徐々にオルコットの攻撃を読んで、一気に懐に侵入して”一撃必殺！”って感じで倒そうとしたけど、オルコットの近接武器、もしくは腰についてたビットで撃ち落されて、そのまま負けた……って感じなんだけど」

やべつ。殆どその通りじゃないか。けどまだ俺は闘ったぜ。

「確かにお前の言った通りだけど、ビットで撃ち落されたとき、^{フラ}次移行が始まったんだ」^{イラストソフト}

「え?!マジで!?!」

夕紀は驚いた表情になる。ふふん、お前の計算でも未来は見えないよ。

「いや、その可能性を考慮しなかった訳じゃないけど……まさか」

「まさか？」

「ここまで一夏が弱かったなんて……」

カチンッ。

「んだよ！失礼だなお前は！」

「だってそうだろ？ 一次移行したのに、お前は勝てなかったってことじゃないか。初期設定の機体で戦えた相手に」

うっ。言われてみればそうだ。一次移行したのなら、強くなって当然。負けるなんておかしい。でもな……理由があるんだ。

「仕方ないんだよ。俺のISは欠陥品らしいし」

「欠陥品？」

「そう。俺の刀は自分のシールドエネルギーを、攻撃に回すんだ」

「……え？ それってワンオフ・アビリティーか？」

夕紀が少し驚いた表情をしてる。そんな驚くことか？

「そうらしい。相手のバリアを無視して直接斬れる代わりに、そのエネルギーはシールドエネルギーから来るんだとよ」

XX

翌日、朝のSRH。クラス代表が決定する日。ありえない事が起きた。

「では、一年一組代表は綾瀬夕紀さんに決定です。満場一致とは素晴らしいです」

おいおい副担任。何を喜んでいるのかな？かな？

言い間違えでしょ。訂正してよ。今ならまだ間に合うだろうからさ。

「先生。一つ質問があるんですが」

「どうぞ、夕紀さん」

「昨日闘った一夏とオルコットを差し置いて、なぜ私がクラス代表なんですか？」

よく平静を保ったと思う。もし一人だったら叫んでたな。

「それは

」

「わたくしが辞退したからですわ！」

大声出して立つオルコット。立つてから、腰に手を当てるまでのモーションが自然すぎる。

「勝負は私の勝ちでしたが、それは当然の事。なので私は”一夏さん”にクラス代表をお譲りしたのです」

と言ったので俺は一夏を見る。今度は一夏が口を開く。

「だが俺は負けたからさ。負けた俺がクラス代表って、おかしいからコッチも辞退したんだ。まあ代表補佐になっちまったが」

嘘だな。どうせ面倒くさいから俺に押し付けたんだ。一夏の笑いを堪えた顔を見ればわかる。

「それはいいとして、なぜ私が？」

そう。これを一番聞きたい。俺は何の関係もないだろ。

「ほら、お前って俺の代わりにセシリアと戦っただろ？」

「………まあ」

「その戦闘を見てた奴、結構いてさ。お前の強さなら代表に任せられる……ってことで」

その言葉に、大体のクラスメイトが頷く。

「グルか！クラス全員グルか！」

「グルとは失礼だな。これはクラスの総意だ。なあみんな？」

「『『『『『その通り！』『』『』『』』」

「……………初めてクラスが一丸になった瞬間だった。

「知らん！こんなの無効！却下却下！私の意志が無視され

」

バシンッ！

「痛い！」

「騒ぐな。鬱陶しい」

きたよ担任教師。ヒーローは遅れて参上ってか？ いやこの場合悪役か。

「決まったことを、いつまでもグダグダと。潔さは大事だぞ」

「いやだって

」

バシンバシンバシン！

「痛い！も、もう結構です！わかりましたから！」

「なら結構」

理不尽ってこの人のためにある様な言葉だ。

「クラス代表は綾瀬夕紀。その補佐は織斑一夏。異存はないな」

「……………もちろんです!」「……………」

またまたクラスが一丸となった。クラスが一致団結するのはとても良い事だ。

しかし……。そこに俺も加えてくれたら……………とても良かったかなと思うんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0512q/>

IS ディストラクション・ルーラー

2011年1月31日14時34分発行